様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３５４０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２５２９

研究課題名（和文）『カンタベリー物語』Hg, El写本及び刊本の編集方法と言語・機能の研究

研究課題名（英文）Editing principles of Hg and El MSs and their editions and their affecting of linguistic and functional properties

研究代表者
中尾　佳行（NAKAO, Yoshiyuki）

福山大学・大学教育センター・教授

研究者番号：１０１３６１５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、G. チョーサーの『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales)のHengwrt MS、Ellesmere MSとBlake (1980)、Benson (1987)の刊本を取り上げ、4テクストのデジタル・パラレルコンコーダンスを精査し、チョーサーテクストの編集過程の解明を試みた。その際、コーパス言語学、英語史、歴史語用論、ナラトロジー等の観点を適時導入した。編集方法として、話し言葉の語りと書き言葉としての写本の緊張関係の中で、両特徴が混在していること、話法の解釈は句読点の有無で主体の解釈に多様性のあること、時制の一致に一貫性のないこと等が分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
チョーサーテクストでオリジナルに近いHengwrt写本とその洗練版のEllesmere写本及びそれぞれに依拠した刊本からなる電子化多層パラレルテクストを活用し、編集過程がどのように類似し、相違しているかを客観的かつ体系的に精査した。口承的な語りに依拠した登場人物の方言の反映とその書き言葉、標準化への改編、写本レイアウトのパラテクストとしての機能、話法に見られる時制とモダリティの異同、刊本との比較で、刊本の句読点は写本が潜在的にもっている主体性（subjectivities）の複合性を狭く閉じていること等が明らかにされた。電子化多層パラレルテクストが編集過程の研究にいかに有益であるかが分かった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to make clear the editorial processes among the two manuscripts (Hengwrt and Ellesmere) and the two editions (Blake 1980 and Benson 1987) based on their digitalized multi-parallel texts. We analysed the texts compratively by introducing the methodologies such as corpus linguistics, the history of English, historical pragmatics, and narratology. Our findings as regards their editorial features are in several domains. Discoveries of the combination of oral narrative features and written features ascribable to manuscripts; manuscripts are open to multiple subjectivities although they tend to be limited to one particular subjectivity in the punctuated edititons; occasional violence of tense concord as seen in the reporting verbs in the past tense and the present tense predication in the indirect speeches; significant relevance to the quesion of medieval "truth" by which gnomic statements are prevalent in the texts and represented in the present tense.

研究分野：人文学

キーワード：Hengwrt MS　Ellesmere MS　Blake (1980)　Benson (1987)　電子多層パラレルテクスト　編集過程　話法　口承性と書き言葉

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

(1)　一般的にチョーサーテクストの編集は、5 つに大別される。

1.写本のファクシミリ
2.ディプロマティック・テクスト（diplomatic text）
3.特定写本を基に編集したテクスト
4.写本を折衷的に用いて編集したテクスト
5.写本・初期刊本を転写・電子化したテクスト

1 は、写本そのものの画像である。写本レイアウトもそのままに示され、その画像はテクストを理解するパラテクスト（paratext）として、即ち、活字テクストと相互補完的に機能してもいる。2 は、単一写本をできる限り忠実に再建したものである。スペリング、句読点、省略、削除、挿入等も含めて転写している。現代のような文法的な句読点の編集は施されてはいない。3 は、Blake (1980) (以下 BL)に典型的だが、特定写本、ヘングウット写本を忠実に反映した現代の刊本である。しかし、飾り文字は無視され、更には中世の文字は使わずスペリング þ が th にモダナイズされ、また写本にはない文法的な句読点も付けられている。4 は、Benson (1987)（以下 BN）に典型的だが、特定写本 EL 写本を軸にしながらも、HG 写本や他写本も取り入れられ、折衷的に編集されている。文法的な句読点については、3 と同様である。写本による文学の語りでは、それを基に小集団に口承的に伝えるのが主流であって、視覚的ではなく聴覚的な情報が重要となる。写本を手に読む読者は、裕福な貴族や商人等、ごく限られた数であろう。この状況では写本の視覚情報は文字テクストを読み解くパラテクストとして機能する可能性がある（松田 2010 参照）。写本では現代のような文法的な句読点は付けられてはいない。3，4 の刊本は、現代の読者が読むことが想定されており、文法的な句読点が編者により付けられている。しかし、それは編者の解釈に委ねられ、編者によりその付け方が流動的であるので注意を要する。5 は、写本並びに初期刊本を忠実に転写、電子化したもので、データ処理を精確かつ迅速に行うことが可能である。写本オリジナルのイメージを転写テクストに対応させたり、また異写本をパラレルに並べた電子化多層パラレルテクスト(multi-layered parallel text)である。

(2) 5 に基づいたチョーサーのテクストの編集過程の研究は Horobin (2003)は Moore (2015)によって部分的に行われてはいるが、体系だった量的・質的研究は未だ不十分であり、再調査の価値があると言える。歴史社会言語学、歴史語用論、言語媒体（話し言葉、書き言葉）、ナラトロジー、写本・刊本の句読点、写本レイアウト等、多くの点で新たな発見が期待される。

２．研究の目的

(1) 本課題研究の目的は、G. チョーサーの『カンタベリー物語』(*The　Canterbury Tales*)の 2 つの代表的な写本とそれに対応する 2 つの代表的な刊本を取り上げ、4 テクストの電子多層パラレルテクストを精査し、チョーサーテクストの編集過程を解明することである。2 つの写本は、Adam Pinkhurst の作成と考えられる Hengwrt 写本（以下 HG）と Ellesmere 写本（以下 EL）、2 つの刊本は、前者に基づく Blake ed.(1980)と後者に依拠した Benson ed.(1987)（以下 BN）を取り上げた。初期刊本についても、適時参照した。

(2) 写本・刊本の編集過程は、歴史社会言語学、歴史語用論、言語媒体（話し言葉、書き言葉）、ナラトロジー、写本・刊本の句読点、写本レイアウト等、種々の異同を通して観察される。これらのデータを統合し、写本・刊本それぞれのテクストの歴史的な推移プロセスのみならず編集態度を明らかにする。

３．研究の方法

(1) 電子化多層パラレルテクストを活用し、コーパス言語学の手法も援用しながら、その類似点と相違点を計量的・統計的に調査する。

(2) 編集方法の違いとその言語・機能を、歴史社会言語学、歴史語用論、ナラトロジー等の観点を適時導入し、考察する。

４．研究成果

(1) 歴史社会言語学及び言語媒体（話し言葉・書き言葉）からの発見

「荘園管理人の話」（The Reeve’s Tale）からの一節：ケンブリッジの学僧、Aleyn は、級友の John に向けて、粉屋の家に泊めてもらうのはいいが、主人のいびきで寝付けない、とこぼす。

```
ReVT 321  HG: This lang⁷ nyght⁷ # ther tydes me na reste
          EL: This lange nyg_ħt / ther tydes me na reste
          BL: This lang_ nyght ___ther tydes me na reste,
          BN: This lange nyght ___ther tydes me na reste;
```

X1: Thys longe nyght ___ther tyd__ me no reste
X2: This longe nyght ___ther tyd vs __no reste

注：HG=Hengwrt MS, EL=Ellesmere MS, BL=Blake's edition (1980), BN=Benson's edition (1987), X1=Caxton's first edition, X2=Caxton's second edition；HG を比較の起点とし、アンダーバー（下線）はそれとの照合で文字列に削除があることを示す；HG と EL はテクスト編集タイプの 2、BL は 3、BN は 4 をそれぞれ電子化したものである（上記 5 つのテキストの大別参照）。#は HG に EL のヴァーギュール(/)が無いことを示す。

HG は lang7 に単音節形容詞・弱変化を示す final –e を付していないが、EL はそれを付している。HG は北部方言で逸早く進んでいた final –e 削除の状態を反映しているが、EL は母音の a は北部方言を踏襲するものの、final –e の付加は、チョーサーの標準形に直している（Horobin 2003 参照）。HG は口承性を重視し、人物の言葉を臨場感を持って反映しており、他方、EL は書き言葉にふさわしく言語を標準形に正していると考えることができる。BL は HG、BN は EL に準拠している。reste の後に BL は読点、EL はセミコロンを加えている。X1 と X2 は、母音も final –e の付加もチョーサーの標準形に編集している。更に言うと、HG と EL は共に動詞の 3 人称単数現在の tydes、そして否定辞の母音 a は、北部方言を採用しているが、X1 と X2 は共に tyd で、es が削除され、また no と、o の母音に編集している。X1 の代名詞は me だが、X2 では us に替えられている。ケンブリッジの学生 Aleyn に、自分だけではなく、John も含めて、この夜なが自分たちは寝付けない（粉屋の主人のいびきで）、と言わせている。初期刊本はチョーサーのオリジナルな言語からは大きく逸脱している。

(2) 英語史（正字法）及び歴史語用論からの発見
「総序」(General Prologue)の修道士の紹介の一節。

GP 178 HG: That seith / ___þ^t hunterys been none ho_ly men
EL: That seith / that hunter_s beth n_at hooly men
BL: That seith that hunterys been none holy men
BN: That seith that hunter_s be_n n_at hooly men,
X1: That seith that hunter_s be__ no_t holy men
X2: That seyth that hunter_s be__ no_t holy men

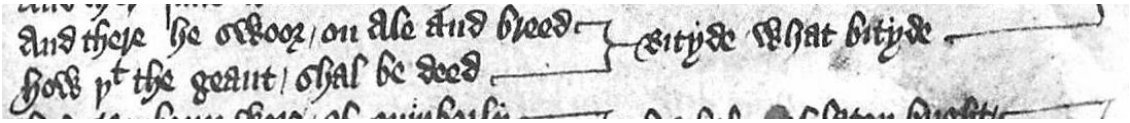
X1 はキャクストンの第 1 版(1478)、どの写本を底本としたかは現在のところ同定されていない。第 2 版(1984)は、キャクストンが序論で、第 1 版の不備をより良い写本を基に改善した、と述べたものである。このより良い写本が何かの跡付けも十分に行われていない。

HG は写本に忠実に転写したものであり、句読点のヴァーギュール（virgule）も再建されている。EL も同様に写本に忠実に転写したものである。HG の been は beth、また HG の none は nat に替えられている。後者は語否定から統語否定への変更でもある。語用論的に見ると、HG の語否定の方が聖人の否定をより強調しているように解せる。BL は HG を忠実に反映したものである。しかし、スペリングの þ が th にモダナイズされている。BN は EL 写本を軸にしながらも、他写本も取り入れ、EL の beth は ben に替えられている。men の後に句読点のコンマが付けられてもいる。X1 も X2 も統語否定を踏襲するが、否定辞は EL の nat ではなく、not である。これは Samuels (1963)の言ったロンドン英語の Type IV である。チョーサーの英語は Type III の nat である。X1 の seith は X2 では seyth に替えられている。句読点は無い。

(3) 写本レイアウト及びナラトロジーからの発見
「サー・トパスの話」（The Tale of Sir Thopas）の一節、場面はサー・トパスが巨人と何が起ころうとも戦うと豪語する箇所である。HG 写本を取り上げてみよう。

＜HG 写本＞
215r TT 0160 And there he swoor / on Ale and breed
215r TT 0161 How þ^t the geant / shal be deed
215r TT 0162 Bityde / what bityde

＜HG 写本ファクシミリ＞



＜BL 版＞
<Th> 872 And there he swoor on ale and breed
<Th> 873 How that the geant shal be deed

<Th> 874　　Bityde what bityde.

2 行目の shal は発話動詞 swoor の過去形との時制の一致がなく、現在形であり、また 3 行目の Bityde what bityde は、譲歩的な誓言、スピーチを彷彿とさせるものである。刊本では引用符を付けてもよい箇所である。ブレーク版の句読点はベンソン版に対し抑制的であるが、ベンソン版は、最後の誓言の後に感嘆符を付け、スピーチの直接性を示そうとしているかのようである。いずれにしろ、両刊本とも引用符を付けていないのは、swoor の間接話法として見なしているからであろう。しかし写本自体は直接・間接いずれにもスリップする柔軟性を潜在させている。更に言えば、HG 写本と EL 写本は、テイルライム(「サー・トパスの話」では基本 aabaab、a1a は 4 強勢、b は 3 強勢の 6 行からなるスタンザで構成されている)の b 行が右のマージンに書かれ、強勢の量の縮減が強調されている本物語ではボブ行（1 強勢）がマージン最後尾に、強調されてもいる。写本レイアウトは 3 つのコラムがあり、左側から右側に向けて漸次音節数・強勢数が減じられている。トパス卿の騎士像の尻すぼみ（アンティクライマックス）と軌を一にしている。写本レイアウトはパラテクストとして物語の解釈の一つの層を浮かび上がらせるが、刊本では、パラテクストの意味合いは捉えられない。上記で示している両写本のディプロマティック・テクストでも、写本レイアウトまでは再現していない。

(4) ナラトロジーと歴史語用論からの発見
『カンタベリ―物語』総序での修道僧（Monk）の描写である。「どうして世間に奉仕しないといけないのか」という件である。

GP 187　HG: As Austyn bitꝛ. ♯ how shal the world be serued　現在形：伝達動詞(「権威」)
　　EL: As Austyn bit__ / how shal the world be serued　現在形：shal; shulde: En3
　　BL: As Austyn bit_? __How shal the world be serued?　St. Augustine [of Hippo]
　　BN: As Austyn bit_? __How shal the world be served?　(354-430) *De opera monachorum*
　　X1: As austyn dide . but hou shal the worlde be serued　(Benson 1987: 807)
　　X2: As Austyn byddeth how shold the world be serued
　　PY: As austyn biddeth how shulde the worlde be serued
　　WY: As austin biddeth hou shold ȝ world be serued
　　TH: As Austyn did / howe shul Þ^{e} worlde be serued

注：PY=Pynson (1492), WY=Wynkyn de Worde (1498), TH=Thynne (1532)

賢人の発言は、真実として X1 と TH を除き、全て現在形（伝達動詞）である。修道僧の自由間接話法（Free Indirect Speech）とも言える“how shall the world be serued”では、X2, PY, WY は過去形である。直説法過去形なのか、仮定法過去形なのか微妙である。後者であるとすると、修道僧は自分の主張を婉曲的に表していると考えられる。法助動詞の改編は登場人物の心理状態の改編にも繋がっていく。

(5) 写本（句読点）と主体性（subjectivities）の問題からの発見
「賄い方の話」の一節を写本と読みの多様性から見直してみよう。写本の異同、また写本と刊本の差異は、テクストの解釈の層の問題に深く関わる。Moore(2015)は「賄い方の話」の最終部、沈黙することの意義付けをしている場面を取り上げ、写本と刊本の違いが読みに大きく関わることを指摘している。EL 写本と BN 版を比較してみよう。

＜EL 写本＞
205v MA 0213　But nathelees / thus taughte me my dame
205v MA 0214　My sone / thenk / on the Crowe on=goddes name
205v MA 0215　My sone / keep¯ wel thy tonge / ⁊ keep¯ thy freend
205v MA 0216　A wikked tonge / is worse than a feend
205v MA 0217　My sone / from a feend / men may hem blesse
205v MA 0218　My sone / god of his endelees goodnesse
205v MA 0219　Walled a tonge / w^{t} teeth ♯ ⁊ lippes eke
205v MA 0220　For man sholde hym auyse / what he speeke　....
205v MA 0258　Kepe wel thy tonge / and thenk vp on the Crowe

ヴァーギュールがあるが、それ以外の句読点は施されていない。引用を示すクオーテーションマーク（quotation mark）は無い。同箇所はベンソン版では、次の通りである。

＜BN 版＞
　MA 0317　But nathelees, thus taughte me my dame:
　MA 0318　" My sone, thenk on the crowe, a Goddes name!

MA 0319　My sone, keep wel thy tonge, and keep thy freend.
MA 0320　A wikked tonge is worse than a feend;
MA 0321　My sone, from a feend men may hem blesse.
MA 0322　My sone, God of his endelees goodnesse
MA 0323　Walled a tonge with teeth and lippes eke,
MA 0324　For man sholde hym avyse what he speeke.　…
MA 0362　Kepe wel thy tonge and thenk upon the crowe.　"

2 行目から最後までダブル・クオーテーション・マークで囲われ、母親のスピーチとなっている。Moore (2015: 172)は写本においては引用符がないことから、narrative か speech の判断は微妙であり、My sone …と始めていても、これは説教に特徴的な gnomic なパタンでもあり、narrative の延長線上でも読み取れ、また伝達動詞の“taught”も人物の直接話法ではなく、語り手の間接的な言説を導く、と解している。中世のテクストにおいては誰が話したかよりは、その内容、権威(autocrite)を重視し、換言すれば、聴衆に対する pedagogical なスタンスが見られる、と指摘する。この教訓は賄い方の母親が彼に、賄い方が巡礼者に、この物語テクストが読者に向けて提示されたものでもある、ベンソンが引用符を付けると写本の重層的な解釈幅を減じてしまうと論じている。写本レイアウトと刊本を丹念に見ていくと、現代の編集テクストでは容易に捉えられない、複数のテクスト、複数の解釈の層が生み出されてくることが分かった。

量的な研究成果の一部は、中尾（2018）にまとめた（final -e の非正用法、worly の語彙選択、childe の意味、統語的流動性、テイルライムの韻律パタン等）。ここでは省略する。

今後は、電子化多層パラレルテクストを活用し、本研究では不十分に終わった、また先行研究でも十分に考察されていない、チョーサーの話法の構造を明らかにしたい。伝達動詞の種類、伝達部の言語指標、時制の一致の問題、モダリティの有無と種類等を体系的かつ統計的に調査し、最終的には話法の電子化意味論コーパスを構築したい。ここでは語りの口承性と写本文化の兼ね合いの問題、真実性の観点（「権威」か個別性かの問題）、そして主体性の関与が重要な鍵語になると考えており、深く掘り下げていきたい。（Cf. 松田 2019）

＜引用文献＞

① Fleischman, S. 1990. *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Austin: University Texas Press.
② Fludernik, M. 1993. *The Fictions of Language and the Languages of Fiction: The linguistic representation of speech and consciousness.* London and New York: Routledge.
③ Fludernik, M. 1996. *Towards a 'Natural' Narratology*. London and New Yokk: Routledge.
④ Horobin, Simon. 2003. *The Language of the Chaucer Tradition*. Cambridge: D. S. Brewer.
⑤ 松田隆美. 2010. 『ヴィジュアル・リーディング　西洋中世におけるテクストとパラテクスト』東京：ありな書房.
⑥ 松田隆美. 2019. 『チョーサー　カンタベリー物語　ジャンルを巡る冒険』慶應義塾大学出版会.
⑦ Moore, C. 2015. *Quoting Speech in Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.
⑧ Nakao, Yoshiyuki. 2018. "The Semantics of Chaucer's speech/thought presentation in *Troilus and Criseyde*." Mizuno and Osamu Imahayashi, eds. The *Pleasure of English Language and Literature: A Festschrist for Akiyuki Jimura*. Hioroshima: Keisuisha, 241-60.
⑨ 中尾佳行. 2018『チョーサーの言語と認知—「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造—』広島：渓水社.
⑩ 中尾佳行・池上忠弘. 2020. 「『カンタベリ物語』(*The Canterbury Tales*)の写本と初期刊本」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第 6 号、101-20.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 中尾　佳行、池上　忠弘.	４．巻 6
２．論文標題 「『カンタベリ物語』(The Canterbury Tales)の写本と初期刊本」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福山大学大学教員センター『大学教育論叢』	６．最初と最後の頁 101-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） -	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中尾佳行	４．巻 5
２．論文標題 「チョーサーの話法の意味論（２）―地の文の現在時制：Tr ５．176-96―」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 福山大学大学教育センター『大学教育論叢』	６．最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中尾佳行	４．巻 5
２．論文標題 「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造―中尾(2018)再考―」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 福山大学大学教育センター『大学教育論叢』	６．最初と最後の頁 101-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中尾佳行	４．巻 4
２．論文標題 「チョーサーの話法の意味論――『トロイラスとクリセイデにおける話法の多次元構造』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 福山大学大学教育センター『大学教育論叢』	６．最初と最後の頁 17-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hideshi Ohno, Akiyuki Jimura, Yoshiyuki Nakao, Noriyuki Kawano, and Kenichi Satoh	4．巻 62
2．論文標題 Textual Variations and Readings among the Manuscripts and Editions of The Canterbury Tales: With Special Reference to The Knight’s Tale	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『英語英文學研究』	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoshiyuki Nakao	4．巻 34: 2
2．論文標題 Review: Evur Happie & Glorious, ffor I Hafe at Will Grete Riches	5．発行年 2018年
3．雑誌名 English Linguistics	6．最初と最後の頁 375-386
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 中尾佳行、地村彰之（討論登壇者）
2．発表標題 企画シンポジウム (Editing and the Interpretation of Texts: Past, Present and Future Practices)
3．学会等名 日本中世英語英文学会第35回全国大会（2019年11月30日、東京未来大学）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Eishi Ohno
2．発表標題 Variations in Use of listen among the Earliest Manuscripts and Printed Editions of The Canterbury Tales.
3．学会等名 International Medieval Congress Leeds 2019 (於 University of Leeds),（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 中尾佳行
２．発表標題 Ⅴ．ワークショップ：チョーサーを読む：チョーサーの「歴史的現在」と視点―「ジェネラルプロローグ」185-89を中心に―
３．学会等名 日本中世英語英文学会：第35回西支部例会　(2019年6月1日、岡山理科大学　岡山キャンパス)
４．発表年 2019年

１．発表者名 中尾佳行
２．発表標題 「中英語韻文に見る話法の意味論―『トロイラスとクリセイデ』を例に―」
３．学会等名 近代英語協会第35大会（シンポジウム：『英語話法に関する史的研究の課題と展望』）　(2018年6月23日、京都大学)
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akiyuki Jimura
２．発表標題 A New Approach to the Manuscripts and Editions of the Canterbury Tales
３．学会等名 The New Chaucer Society (於　University of Toronto, 10-15 July 2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Eishi Ohno
２．発表標題 Variation among Manuscripts and Editions of the Canterbury Tales: With Special Reference to the Use of Personal and Impersonal Constructions
３．学会等名 The New Chaucer Society (於　University of Toronto, 10-15 July 2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中尾佳行
２．発表標題 「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造」
３．学会等名 日本中世英語英文学会第34回全国大会（2018年12月2日、愛知教育大学）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 中尾佳行	４．発行年 2018年
２．出版社 渓水社	５．総ページ数 230
３．書名 『チョーサーの言語と認知―「トパス卿」の言語とスキーマの多次元構造―』	

１．著者名 Yoshiyuki Nakao, Hideshi Ohno, Kazuho Mizuno, Osamu Imahayashi	４．発行年 2018年
２．出版社 Keisuisha	５．総ページ数 400 (pp. 241-260)
３．書名 Hideshi Ohno, Kazuho Mizuno, and Osamu Imahayashi, eds. The Pleasure of English Language and Literature: A Festschrift for Akiyuki Jimura. Hiroshima: ”The Semantics of Chaucer's speech/thought presentation in Troilus and Criseyde: The emergence of conceptual blending." (pp. 241-260)	

１．著者名 Yoshiyuki Nakao, Akinobu Tani, Jennifer Smith	４．発行年 2017年
２．出版社 Kaitakusha	５．総ページ数 142 (pp. 91-117)
３．書名 Akinobu Tani and Jennifer Smith, eds. Studies in Middle and Modern English: Historical Variation：“Chaucer’s Comment Clauses with Reference to Trowe and Wene.” (pp. 91-117)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	地村　彰之 (JIMURA Akiyuki) (00131409)	岡山理科大学・教育学部・教授 (35302)	
研究分担者	佐藤　健一 (SATOH Kenichi) (30284219)	広島大学・原爆放射線医科学研究所・准教授 (15401)	
研究分担者	川野　徳幸 (KAWANO Noriyuki) (30304463)	広島大学・平和センター・教授 (15401)	
研究分担者	大野　英志 (OHNO Eishi) (80299271)	広島大学・文学研究科・准教授 (15401)	